

第1章: 記念すべき初日

この街は、穏やかな住宅街が広がる普通の地方都市だ。僕、友達もそこそこいて、成績もまあまあだ。自分で言うのも変だが僕は上手くやっていると。とはいえ、まだ世間知らずの部分も多いが。平凡な日常を送っているつもりだった。でも、この国独特の制度が、僕の人生を一変させることになるなんて、想像もしていなかった。

この国では、「男性貞操管理法」という法律がある。この国の定める「男性成人」の年齢になると、国が自動的に決めた女性、マスターに射精管理をされる制度だ。目的は、出生率の向上や男性の性的健康管理、とされている。

しかしネットの噂では女性の社会的優位性を維持するためのものだと言われている。男性の一番大事な部位を無理矢理女性に譲渡させ、三大欲求の一つを無理矢理奪う。男性の欲求をコントロールすることで、女性に服従させ、犯罪率を下げたり、家庭の安定を図ったりと。いずれにせよ、拒否権はなく強制的に適用される。拒否は重罪で逮捕された挙句、一生塀の中で過ごすことになる。

僕の男性成人の日がちょうど今日。何がいつどこで起こるかも分からず朝からそわそわしていたけど、夕方になってようやく、その時が来た。玄関のチャイムが鳴り、ドアを開けると、そこに立っていたのはお隣の鈴音（すずね）さん。

お姉さん――25歳の会社員。黒髪のロングヘアがサラサラと揺れ、優しい笑顔が印象的な綺麗な女性だ。僕が小さい頃から知っている人で、よくお菓子をくれたり、勉強を教えてくれたりした。憧れのお姉さんみたいな存在。身長は僕よりずっと高くて、スタイルが良くて、清楚なスカート姿がいつもドキドキさせる。今日も、仕事帰りらしいスーツ姿で、柔らかな胸のラインが強調されている。

「僕くん、男性成人おめでとう！ 今日からよろしくね。」

彼女の声は、甘くて優しい。手には深い黒に塗られた重厚な小さな箱を持っている。中身はおそらく――僕用に作られた国が発行した貞操帯。

部屋に上がってもらい、リビングで向かい合う。僕の心臓が早鐘のように鳴っている。ネットで見た情報では、この貞操帯は特殊合金製の超耐久性で、重機で踏み潰しても潰れないらしい。鍵は電子鍵で量子暗号化されていて、ハッキングしようとしても数世紀はかかるという。

女性しか解除コードを持ってない仕組みで、一度装着されたら、マスター女性の許可なしでは絶対に外せない。

「じゃあ、始めましょうか。僕くん、ズボンパンツ下げて」

先ほどの柔らかい笑顔と声は消え、凍てつくようなお姉さんの声に、心臓が締め付けられる。恥ずかしい、怖い、でも拒否できない。法律だから。震える手でズボンとパンツを下ろす。下半身が露わになり、冷たい空気に触れて、少し縮こまる。

お姉さんは箱を開け、貞操帯を取り出す。金属のリングとケージ部分が、鈍く冷たく光っている。リングは根元を締め付けるためのもの、ケージは亀頭を覆い隠す牢獄だ。彼女は膝をついて、僕の前にしゃがむ。フワッと髪がなびき、数秒遅れて僕の鼻に甘い匂いが漂った。

「ふふ、僕くん、緊張してるの？ お玉ちゃんが縮こまっちゃってるよ」

フツと玉に息を吹きかけ人差し指と中指で玉を挟み込む。

「かわいいね♡ でも心配しないで、私が優しくつけてあげるから。」

お姉さんの細い指が、玉の裏を撫でる。まだ何もされていないのに、反応し始めてしまう。お姉さんはくすくす笑いながら、リングを根元に滑り込ませる。冷たい金属の感触が、敏感な皮膚に食い込む。次にケージを被せ、鍵部分を合わせる。
カチリ、という音。電子鍵のLEDが赤く光った。

ロック完了。

「できたわよ。どう？皮膚はかんでない？」

「う、うん、でもこれ本当に外れない…」

少し自分でいじってみるが無慈悲なカチャカチャという音が鳴るだけである。

「うんうん、似合ってるよ！♡」

下半身に重い圧迫感。ケージがぴったりとフィットして、膨張の余地がない。少し動くだけで、内側に擦れて、むずむずする。

「うっ……お姉さん、これ、キツイ……一回外して、お願い……」

僕は腰をくねらせてみた。自力で外そうと、もう一度リングを引っ張ってみるけど、びくともしない。僕の体が「貞操管理」がいよいよ始まったのだと理解し始めた。じわりと汗が出て背中を雫が垂れる。今一度僕はリングを力強く引っ張った。すると貞操帯がピピッ！と警告音が鳴り響いた。

「だ一めよ、僕くん。そんなことしたら、近所中にバレちゃうわ♡ 法律は法律。今回は一週間だけ我慢してね。ちゃんと耐えられたら、ご褒美あげるから。」

お姉さんは立ち上がって、僕の頭を優しく撫でる。まるで子供をあやすような仕草。でも、目の奥にはマスター女性としての支配的な光が宿っている。

「でも、お姉さん……これ、外せないの？ 本当に自分では外せないの？」

僕はさすがに聞く。ネットの情報が本当か、確認したかった。

「ええ、そうよ。量子暗号だから、ハッキングなんて無理無理♡ 重機で壊そうとしても、内部のセンサーが作動して、自動で警察に通報されちゃうんだから。僕くんは今日から、私の管理下。射精しなくなったら、ちゃんと私にお願いするのよ。でも、すぐに許してあげるかどうかは……私の気分次第だけどね♡」

彼女の手、僕の頭を撫でる。甘い吐息が耳にかかる。

「わ、わかった……我慢する……」

「ん。いい子♡」

お姉さんが再び僕の頭を早く撫でる。

そうは言ったものの、心の中ではすでにパニック。今まで自由に射精していたのが今日から一生できないのだ。今この瞬間も貞操帯の存在が気になって仕方ない。冷たい無機質な檻が僕のおちんちんを閉じ込めている。

お姉さんが帰った後、いつも通り夜ご飯を食べた。テレビを見た。お風呂に入った。でも集中できない。夜、ベッドに入ってから、下半身の圧迫感が眠りを妨げる。少し勃起しようとするだけで、ケージが食い込んで痛い。

翌朝、目が覚めると、朝立ちの欲求が爆発しそう。必死で抑えようとするけど、無理。お姉さんに連絡しようか迷うけど、初日で懇願するのは怒られそう。我慢ができず自分で外そうと、鏡の

前で何度も試す。リングを回したり、ケージを押し込んだり。もうどうにでもなれと適当に電子鍵を触ってみる、が頑として動かない。警告音が鳴り響き、慌てて触るのを止める。

諦めて学校に行く準備をしていると、お姉さんからメッセージが来る。

『おはよう、僕くん。今日までの状態、報告してね。どれだけ我慢してるか、詳しく教えて♡もちろん、嘘なんてついたらダメよ♡』

こちらの状態など统统の昔にお見通しのようなメッセージに顔が赤くなる。気のせいだろうか、僕の心のどこかでお姉さんに対して小さな反抗心のようなものが芽生えた。だから僕はメッセージに返信しないでそのまま学校へ行った。

授業中も、貞操帯の感触が気になって、ノートを取る手が止まる。友達に気づかれないよう、姿勢を正すけど、内側で擦れる刺激が、緩やかな拷問のようだ。

このクラスに男性成人を迎えた人はいるのだろうか？いるとすればその人はどんな女性が管理しているのだろうか。どれくらいの頻度で射精しているのだろうか。射精、射精、射精...

ことある度に射精のことが頭に浮かび、今日の授業内容は頭に入らなかった。夕方、家に帰ると、お姉さんが玄関で待っていた。

「僕くん、帰ってきたの？メッセージの返事を聞かせて♡」

リビングで向かい合い、僕は恥ずかしげに報告する。朝の勃起、授業中のむずむず、帰り道の欲求.....全部。

お姉さんはにこにこしながら聞く。

「ふふ、よく我慢したわね。でもね、僕くん、お姉さんに何か隠しているでしょ？正直に言ってる？」

お姉さんの声のトーンが急に暗くなる。鋭い視線に捉えられ、逃げられないと直感した。どんな隠し事や嘘もこの女性には通用しない。恐怖を感じた。僕は今朝貞操帯を外そうとしたこと、僅かな反抗心からメッセージを無視したことを話した。

「ふーん、そんなことをね」

お姉さんは立ち上がりこちらに歩いてきた。怒られるかもしれないと思った。でもお姉さんから出てきた言葉は予想外のものだった。

「正直に言えたね。いい子、いい子」

優しく僕を抱きしめ、頭を撫でてくれた。

「正直に言ってくれたご褒美に貞操帯、少しだけ緩めてあげるね。射精はオアズケだけどね」

名残惜しくお姉さんが離れると、お姉さんはスマホでコード、指紋、顔認証を入力。貞操帯のLEDが緑に変わり、少しリングが緩む。でも、完全に外すわけじゃない。ただの緩和。

「これで少し楽になるでしょ？でも、射精はまだダメよ。1週間の終わりまで、ちゃんと耐えてね♡」

彼女の指が、ケージ越しに優しく撫でる。甘い刺激が走るけど、到達できない。寸止め状態。

「んっ.....お姉さん...もっと.....」

「だ一め。ご褒美は来週♡僕くんは私のいい子でしょ？」

その日から、僕の日常はお姉さんの甘い管理に染まっていく。抵抗は無意味。毎日どれだけ苦しんだかの報告、時々の緩和、そして延々と続く我慢。1週間が、永遠のように感じ始める。日が経つにつれ1日がどんどん長くなっていく。

でも、どこかで、この甘い檻が心地よくさえ思えてくる。お姉さんの笑顔が、すべてを許してしまう。